

## 意味から見た派生名詞の前置詞

小川 明

(平成8年9月30日受理)

### Prepositions of Derived Nominals and Semantics

Akira OGAWA

(Received September 30, 1996)

0. 本稿では小川(1996)から出発して、派生名詞の取る前置詞について意味の観点からさらに調べてみたい。一般に他動詞に由来する派生名詞では of が生じる。このことが、Chomsky(1970)が of 挿入規則を仮定する根拠になっていると思われる。例えば the indication of disapproval は D 構造では of は存在していないで、後の段階で of が挿入されると考えられている。たしかに多くの場合、of が生じる。

- (1) a. destroy NP  
b. destruction of NP
- (2) a. indicate NP  
b. indication of NP
- (3) a. include NP  
b. inclusion of NP

しかし of 以外の前置詞を取ることもあるのである。Ito (1991)はさまざまな前置詞が生じることを指摘している。例えば、

- (4) a. resemble NP  
b. resemblance to NP

このように to を取る例は他に、approach, contradict, obstruct, obey などがある。

- (5) a. attack NP  
b. attack on NP

この他に assault, discuss など that on を取る。

- (6) a. enter NP  
b. entrance into NP

investigate もそうである。

1. 本稿では、このように of 以外の前置詞を取る例につ

いて考察する。動詞ばかりでなく形容詞に由来する派生名詞も対象とすることにする。まず最初の問題は、どの前置詞を取るかが何と関連しているのかという事である。以下動詞に由来するものをタイプ別に整理してみる。

A 自動詞に由来する派生名詞の場合は、自動詞の取る前置詞

- (7) a. accord with           accordance with
- b. add to                addition to
- c. adhere to           adhesion to
- d. agree with          agreement with
- e. allude to           allusion to
- f. coincide with       coincidence with
- g. collide with       collision with
- h. depart from        departure from
- i. depend on           dependence on
- j. harmonize with     harmony with
- k. long for             longing for
- l. reply to             reply to
- m. tend {to,toward}   tendency {to, toward }
- n. testify to          testimony to
- o. yearn for           yearning for

B 他動詞と自動詞の両方で使われる動詞に由来する時は自動詞の取る前置詞

- (8) a. answer (to)           answer to
- b. attend (at)        attendance at
- c. claim ({for,to})   claim {for, to}
- d. crave (for)        craving for
- e. enter (into)        entrance into
- f. escape (from)      escape from
- g. flee (from)        flight from
- h. wish (for)          wish for

\* 英語英文学科 第一英語学研究室

C 前置詞を用いる構文が存在する時、その時の前置詞

- (9) a. add~to~ addition to~  
 b. allocate~ allocation of~  
     {for, to}~ {for, to}~  
 c. appeal to~for~ appeal to~for~  
 d. identify~with~ identification with~  
 e. warn~about~ warning about~

D 対応する形容詞があれば、たとえ動詞が前置詞を取らなくてもそれと共に生じる前置詞

- (10) a. be addicted to addiction to  
 b. be alarmed alarm {about, at,  
     {about, at, over} over}  
 c. be alienated from alienation from  
 d. be alluring to allurement to  
 e. be amazed at amazement at  
 f. be acquainted with  
     acquaintance with  
 g. be consistent with  
     consistence with  
 h. be contradictory to  
     contradiction to  
 i. be fascinated with  
     fascination with  
 j. be married to marriage to  
 k. be helpful to help to  
 l. be obedient to obedience to  
 m. be obstructive to  
     obstruction to  
 n. be offensive to offense to  
 o. be opposed to opposition to  
 p. be repentant for repentance for  
 q. be resistant to resistance to

E 今まで挙げた関係づけができないもの

- (11) a. admire admiration for  
 b. demand demand for  
 c. desire desire for  
 d. request request for  
 e. require require for  
 f. attack attack on  
 g. control control over  
 h. accompany accompaniment to

- i. damage damage to  
 j. resemble resemblance to  
 k. solve solution to  
 l. warn warning to

さて形容詞に由来する派生名詞はどうであろうか。

- (12) a. be absent from absence from  
 b. be alert for alert for  
 c. be allergic to allergy to  
 d. be angry at anger at  
 e. be apt for aptitude for  
 f. be aware of awareness of  
 g. be capable of capability of  
 h. be clever at cleverness at  
 i. be curious about curiosity about  
 j. be difficult for difficulty for  
 k. be eager for eagerness for  
 l. be familiar with  
     familiarity with

形容詞の場合は必ず前置詞を伴うので動詞のAタイプと同じと考えてよいであろう。

2. 以上の観察から導ける原則は、先ず第一に「対応する動詞あるいは形容詞がなんらかの仕方前置詞を用いていれば、派生名詞においても、それと同じ前置詞を取る。」ということである。それでは、関係づけができないもの時は何によって前置詞が決定されるのであろうか。まず(11)のなかで for を取るものについて考えてみよう。これらはすべて意味が類似して、およそ「欲求・要求」の意味を含んでいると言える。そしてこの「欲求・要求」の意味を含む (7k), (7o), (8c); (8d), (8h)もまた for をとることに注意すべきである。

さて (11j) の resemblance は to を取るのであるが、なぜか。以下の例を観察してみよう。

- (13) a. closeness to  
 b. comparison to  
 c. correspondence to  
 d. equality to  
 e. likeness to  
 f. similarity to

これらはすべて resemblance と同様「類似」の意味を含んでいる。このように「類似」の意味を持つ時は、一般に to を取ると言える。

また (11k) solution が to を取ることも、同じような意味「答」を含む (8a) answer が to を取ることから導き出すことが出来る。

このことから以下のように考えられる。前置詞を使っている対応物がまったくない場合は、「意味が類似している派生名詞（あるいは普通の名詞でもよい）が取るのと同じの前置詞を取る」という原則によって決定される。

さらにこの原則で説明できる例を挙げてみる。

「戦い」 against, with

battle, fight

「試み」 at

attempt, effort, endeavour, try

「敬意」 for

adoration, regard, respect, reverence, veneration

「攻撃」 on

assault, attack, attempt(攻撃の意味), onslaught, pounce, raid

against

aggression, attack, assault, offense, offensive, raid

「接触」 on

pat, tap, touch

「支配」 over

authority, control

「援助」 to, for

aid, assistance, help

「接近」 to

access, approach

「付加」 to

addition, attachment

「障害」 to

barrier, hindrance, hurdle, obstacle, obstruction

「上昇」 to

ascent, climb, rise

「対立」 to

contradiction, contrary, contrast, objection, opposition

「一致」 with

accordance, agreement, coincidence, concurrence, consistence, correspondence,

harmony

「結合」 with

combination, connection, link, relationship

「出会い」 with

collision, correspondence, date, encounter

以上の観察から前置詞の決定には、意味が重要な役割を担っていることが明らかである。そのことをさらに支える事実を指摘しよう。意味によって分類してきたのであるが、その分類どうしの間の意味が接近していれば同じ前置詞を取っている。例えば(13)「類似」は「接近」ときわめて意味が近い。そしてどちらも同じ to を取っている。さらに「一致」「結合」「出会い」も意味が近いので with を選択する。

また affiliation, connection, link, relationship, tie は with だけでなく to も取るのであるが、これは「結合」という共通点に注目すれば、with を選択し、「類似」と考えれば to を選択すると説明することが可能である。

3. それでは、なぜこれらの派生名詞は、目的格関係を示すのに、of 以外の前置詞を伴わなければならないのであろうか。of を取る派生名詞との間になにか決定的な差が存在するのであろうか。あるとすれば意味が深く関与していると思われる。それは今までの観察をみてみれば、明らかである。

この意味とは何なのか。すぐ頭に浮かぶのは、伝統文法でいう「再帰目的語 (reflexive object)」、 「手段の目的語 (instrumental object)」、 「結果の目的語 (object of result)」、 「同族目的語 (cognate object)」、 「換喩的目的語 (metonymic object)」などの目的語の種類であるが、これとは直接には関係がなさそうである。格文法の格、例えば、具格 (Instrumental)、与格 (Dative)、作為格 (Factitive)、所格 (Locative)、対象格 (Objective)、受益格 (Benefactive) など、また生成文法でいう theta 役割、例えば、主題 (theme)、起点 (source)、着点 (goal)、場所 (location)、被動者 (patient) などにはかなり一致する部分があるように思われる。例えば受益格は for、起点は from、そして、対象格の多くは of。

しかしすでに調べた意味の区別からみると、もっと細かな意味を問題にしなければならぬだろう。例えば Levin (1993: 5-11) は、cut, break, touch, hit が次

の構文について、違った振る舞いをするを説明するのに、その動詞の意味の違いに注目している。

- (14) a. Margaret cut the bread.  
 b. Janet broke the vase.  
 c. Terry touched the cat.  
 d. Carla hit the door.
- (15) a. The bread cuts easily.  
 b. Crystal vases break easily.  
 c. \*Cats touch easily.  
 d. \*Door frames hit easily.
- (16) a. Margaret cut at the bread.  
 b. \*Janet broke at the vase.  
 c. \*Terry touched at the cat.  
 d. Carla hit at the door.
- (17) a. Margaret cut Bill on the arm.  
 b. \*Janet broke Bill on the finger.  
 c. Terry touched Bill on the shoulder.  
 d. Carla hit Bill on the back.

Levinは「運動 (motion)」, 「接触 (touch)」, 「状態の変化 (change of state)」, 「使役 (causation)」の意味を含んでいるかどうかによって、これらの構文について説明できると論じる。例えば、breakは純粋に「状態の変化」を示す動詞で、必ずしも「接触」をする必要はないが、cut, touch, hitは「接触」の意味を含んでいる。「接触」の意味を持つ動詞のみが、(17)の構文で用いることができるのである。その他の構文についても同じような説明を試みる。本稿で扱う問題もこの程度の細かい意味の差を考慮する必要があると思われる。

4. さてここで注目すべきことは、(8)の例である。これらの動詞は他動詞で用いることができるのに、わざわざ前置詞を伴う自動詞の用法も兼ね備えている。この二つの自他の用法の間の関係はなにか。これは、runのように同じ動詞を自動詞と他動詞の両方で使う時の関係とは明らかに違う。(8)では、他動詞と目的語との意味関係をよりはっきりと前置詞を使って表現したのである。例えば answer の対象をはっきりと示すために to を、escape の起点を示すために from を用いるのである。

この関係は、次の(18)の of とその他の前置詞の関係と類似している。

- (18) a. an agent {for, of} his country  
 b. a good article {on, of} gardening

- c. a chauffeur {to, of} a rich family  
 d. control {over, of} oneself  
 e. the doors {to, of} heaven and hell  
 f. the entrance {to, of} the cave  
 g. the father {to, of} the man  
 h. justification {for, of} the means  
 i. line 10 {on, of} page 20  
 j. my opinion {on, of} the political situation  
 k. passengers {on, of} the train  
 l. a story {about, of} a horse  
 m. a tutor {to, of} their son  
 n. the shooting {by, of} the rebels

of は小川 (1996) で論じたように、たくさんの相互に関係のないばらばらの意味を持っている。言い換えれば、曖昧さを持つ表現である。例えば、

- (19) a. the queen of England (所有・所属)  
 b. the coming of the night (主格関係)  
 c. the love of adventure (目的格関係)  
 d. the crime of murder (同格関係)  
 e. the story of adventure (関係・関連)  
 f. a man of courage (抽象名詞と共に)  
 g. the England of today (時)

などがある。それ故、(18)では、of が持つさまざまな意味をもっと明確に表現するために、他の前置詞が使われていると見做すことができる。

このように考えると、次の観察にも同様の説明を与えることができる。「英語語法大事典」(pp. 994-5)は、Thorndike Barnhart: *Junior Dictionary* (s.v. Think) に基づいて、次のように述べている (下線は筆者)。

「……think about も think of もともに「……について考える」の意味ですが、about のほうに一そう「……について、関して」の意味が強く出ています。そして think about がいろいろ思いを回らし、心を用いる行為が積極的であるのに対し、think of のほうは「……(のこと)を思うの意味で、思いが何かの原因でその対象に及ぶのであって行為そのものは消極的です。

これは多分 about が of と違って意味が鮮明であるからだと思います。

5. さて(8)の他動詞対自動詞+前置詞の二つの関係は既に Gruber (1976) によって編入 (Incorporation) という概念で捉えられている。その中の義務的要素の任意的編入にあたるであろう。このタイプの動詞の例はfall である。

- (20) a. That apple will soon fall.  
 b. That apple will soon fall down.  
 c. \* That apple will soon fall up.

fall は常に下方向への移動を表わす。つまり DOWN という概念は fall にとって義務的要素である(20c)。しかしこの DOWN は編入して fall(20a)としても、編入しないで fall down (20b)と表現してもどちらでもよい。つまり編入は任意である。これは descend とは対照的である。descend も DOWN という概念を持つが(21c)、必ず編入しなければならない(21b)。

- (21) a. Hilary descended.  
 b. \* Hilary descended down.  
 c. \* Hilary descended up.

簡単にいえばある意味を表現するか、表現しないのかという問題である。DOWN について fall の類はどちらでもよいが、descend の類は表現しないという選択しかできない。ただし派生名詞 descent になると、down を前置詞として取る。

この編入が任意か義務的かという観点から (7), (8), (11) を見なおしてみる(cf. Ito(1991: 58-9))。 (8) は今まで論じてきたように、どちらでもよく任意である。(7) は編入をしてはならない。逆に(11) は必ずしなければならない義務的である。特に最後の (11) が問題になる。なぜ (7), (8) と違って義務的なのだろうか。この二者の間に動詞の持つ意味の複雑さに差があるようには思えない。例えば talk about と discuss を比較した場合、なぜ一方は about を編入してはならず、片方はしなければならないのだろうか。それとは別に二者を隔てているなにか要因が存在するのであろうか。あるいは、全く個別的なものなのであろうか。今のところよくわからない。はっきりしていることは、(11) の動詞についても派生名詞形になると、その動詞が含んでいる意味を表現できるような、of 以外の前置詞を伴わなければならないことである。つまり問題になっている意味要素を編入できないのである。

このことは、前置詞の持つ固有の意味と動詞の持つ固有の意味との間に矛盾がないのだということになる。例

えば「出合い」とwithの持つ「一緒」の意味はぴったりと合う。ということは動詞の意味が分かれば前置詞の予想はある程度つくということになる。

6. 最後に日本語について簡単に調べてみよう。文における「が」、「を」は、名詞では「の」で対応する。しかし「に」、「から」、「と」、「へ」の場合はそのまま残り、それらに「の」が追加される。

- (22) a. 花子が帰宅する      花子の帰宅  
 b. 事件を調査する      事件の調査  
 c. 車を運転する      車の運転  
 d. 花子と結婚する      花子との結婚  
 e. アジアへ進出する      アジアへの進出

しかし「を」をとるにもかかわらず「の」で対応しないものがある(杉岡(1988:184)による)。

- (23) a. 花子を励ます      花子への励まし  
 b. 花子をいたわる      花子へのいたわり  
 c. 花子を誘う      花子への誘い

この種の例を新しく追加してみよう。

- (24) a. 東京を出発する      東京からの出発  
 b. アパートを引っ越す      アパートからの引っ越し  
 c. 彼を尊敬する      彼への尊敬  
 d. 彼を恐れる      彼への恐れ  
 e. 彼を援助する      彼への援助

(22b-c)が英語のofを取る派生名詞に、(23)-(24)の類が英語のof以外の前置詞を取る(11)に対応すると考えてよいであろう(「の」とofの親近性については小川(1996)を参照して下さい)。

それでは2節で使った英語の意味分類を利用して、それと類似の意味を持つ日本語の動詞の名詞形について調べてみよう。

- (25) a. ーと戦う      ーとの戦い  
 b. ーを試みる      ーへの試み  
 c. ーを尊敬する      ーへの尊敬  
 d. ーを攻撃する      ーへの攻撃  
 e. ーと接触する      ーとの接触  
 f. ーを支配する      ーへの支配  
 g. ーを援助する      ーへの援助  
 h. ーに接近する      ーへの接近  
 i. ーに追加する      ーへの追加  
 j. ーを妨げる      ーへの妨げ  
 k. ーに登る      ーへの登山

- |    |        |        |
|----|--------|--------|
| l. | —と対立する | —との対立  |
| m. | —と一致する | —との一致  |
| n. | —と結合する | —との結合  |
| o. | —と出会う  | —との出会い |

(25)を見れば、これらの日本語の名詞が、「の」だけではなく同時に他の助詞である「へ」や「と」も必要とすることがわかる。類似の意味を持つ英語の派生名詞は、2節で示したようにof以外の前置詞を取っていた。ofが「の」に対応し、of以外の前置詞が「助詞(へ、と等)」+「の」に対応すると見做すことが正しければ、同じような意味を持つ名詞が、日本語と英語で似た振る舞いをしていることになる。このように英語と日本語で共通点があることは、意味が深く関与していることを示唆しているのではないだろうか。もうひとつ注意すべきことは、(25)において日本語ではももとの動詞が「を」だけではなく「に」や「と」を取るものがあるということである。このことは、英語では他動詞で一括して扱っている意味の区別を、日本語では区別して「を」、「に」、「と」に分けているのだと考えられる。言い換えれば、日本語と比べると、英語の他動詞と目的語との間の関係はより多様であって、その関係は派生名詞になった時はじめて、さまざまな前置詞という形で、顕在化することになる。

7. 以上本稿では小川(1996)を土台にして派生名詞の取る前置詞についてさらに調べてみた。

#### 参考文献

- Chomsky, N. 1970. Remarks on nominalization. *Readings in transformational grammar*, ed. by R. Jacobs and P. Rosenbaum, 184-221. Waltham, MA: Ginn and Company.
- Gruber, Jeffrey S. 1976. *Lexical structures in syntax and semantics*. Amsterdam: North-Holland.
- 石橋幸太郎他編集. 1966. *英語語法大事典*. 東京:大修館.
- Ito, T. 1991. C-selection and s-selection in inheritance phenomena. *English linguistics* 8. 52-67.
- Levin, Beth 1993. *English verb classes and alternations*. Chicago: University of Chicago Press.
- 小川 明. 1996. 派生名詞と前置詞に関する試論. *東京家政大学研究紀要* 36. 143-149.
- 杉岡洋子. 1989. 派生語における動詞素性の受け継ぎ. 久野 暉・柴谷方良編集「*日本語学の新展開*」167-185.